Nagoya Linguistics（名古屋言語研究） 10.18999/nagl.15.29
2021 Vol.15, pp.29-42

モノスの自・他用法と他動詞用法の拡大について

余飛洋（名古屋大学大学院人文学研究科日本語学分野・専門）

要旨

古代日本語のモノスは、実質動詞として自動詞用法と他動詞用法をともに備えていたが、中古から中世にかけては、移動動詞と存在動詞を中心に、自動詞の代用となるモノスが多用されている。他動詞としてのモノスは、他動性が弱い他動詞の代用となっている場合がほとんどである。近世に入ると、他動性が強い他動詞用法が現れ、他動詞としてのモノスの使用が優勢となりはじめる。近現代になると、90%以上のモノスが他動詞として使われるようになった。近世以降 70%以上の用例は、動作の達成・到達の結果、目に見える/手に触れる結果物が伴う、他動性が強い他動詞としての用法に偏る。一方、このような、モノスの「達成する」「結果物がある」という特性は、中古の自動詞用法においても認められ、一貫性が見える。他動詞用法の拡大は、この特性が近世以降、明確化・具体化した結果と言える。

1、はじめに

古代日本語のモノスは、実質動詞用法と補助動詞用法を持つ（東辻（1960））。補助動詞用法としてのモノスは、補助動詞「-あり」に相当し、述語の連用形に接続する。例えば、(1)は、モノスが名詞述語（断定辞ナリ）の連用形句「侍従に」に後接し、「まだ侍従でいらっしゃったころ」を意味する。また、補助動詞用法のモノスは、(1)「-ものしたまふ」の形で、補助動詞「-あり」の尊敬語としても中古で多用されている（中村（1995）、金水（2006）、小田（2015））。

(1)　左兵衛の督の君、侍従にものしたまひけるころ、　（大和物語・317 頁）

一方、実質動詞用法としてのモノスは、(2)のような、独立動詞としてある動作を代用する場合と、(3)のような、複合動詞の後項と考えられる場合がある（呉（2019））。

(2)　「何もあらむ物賜へ」と言ひにやりたれば、（略）「（略）この焼米は露といふらむ人にものしたまへ」と言へり。　（落窪物語・34 頁）

(3)　「（略）このごろもあやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、（略）」と聞こゆ。　（源氏物語/東屋・86 頁）

(2)は、モノスが出現する前文脈に、具体的な語句「物賜へ」があり、モノスの意味が「賜う」と規定されるものである（東辻（1960））。(3)のモノスは、動作主が動作をした後、その場にじっと留まっており、「ものす」が「ゐる」の代用をしていると考えられる。本稿では、(2)と(3)のようなモノスの実質動詞用法を、自動詞用法と他動詞用法に分けて時代別に検討する。

2、先行研究と問題の所在

松延（1957）は、まず平安時代の物語・日記・随筆のモノスを観察し、どのような意味に用いられているのかにより用例を自動詞と他動詞に分け、用例数全体に対する割合を示している。一般的には、中古のモノスは自動詞として用いられている用例が多いという。

松延（1957）によると、中古では、モノスの実質動詞用法のうち、60%以上の用例が自動詞として使われるという。松延（1957）は中古のモノスに関する最初期の記述的研究として注目できる。特に自動詞か他動詞かに注目した先行研究としては唯一の研究である。しかし自動詞・他

動詞の使用傾向や、分類基準などは明示されていない。

本稿の調査でも、松延(1957)が述べるとおり、中古のモノスは、自動詞相当の用例が多い。一方、他動詞としての用例は、文脈上「言う」や「思う」などに相当する例が大多数を占める。これらは、他動性が弱い動作を表す動詞である。本稿では、まず、この点に注目する。「他動性」というのは、「参加者が二人(動作者と動作の対象)又はそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある。)」(角田(2009)、p.77)という、動詞の性質を指す。動作主の意志性や、対象物に及ぶ変化の有無（強弱）によって、高低がある。角田(2009)は、「見る」「見える」や「聞く」「聞こえる」など、知覚の動詞の場合には、厳密に言えば、何の動作もないとし、「何かが向かって行くとしたら、それは、知覚の刺激である。視覚の場合は光であり、聴覚の場合は音波である」（角田（2009）、p.68）と指摘している。従って、他動詞の代用として使われているとしても、動作があるとは限らない。「言う」「思う」といった他動詞に相当する中古のモノスの他動詞用法は、このような、他動性の弱い例に限られることになる。

一方、筆者の調査[1]では、近世から他動性が強い動作を意味する他動詞用法が現われ、用例数も多くなる。以下の表 1 に、実質動詞を対象とした各時代の自動詞の用例数と他動詞の用例数を示す。表 1 によれば、近現代になると、自動詞としての用例は僅かになり、90%以上の用例が他動詞として用いられるようになることがわかる。つまり、自動詞用法が減少する一方、他動詞用法が拡大している。その変化は、どのような方向性の変化なのだろうか。

表 1. モノスにおける自動詞と他動詞の用例分布

時代	自動詞	他動詞	計
中古	385(66.7%)	192(33.3%)	577
中世前期	248(85.2%)	43(14.8%)	291
中世後期	24(92.3%)	2(7.7%)	26
近世	25(17.2%)	120(82.8%)	145
近現代	5(4.3%)	112(95.7%)	117
計	687	469	1156

本稿では中古から近現代までのモノスについて、動作主・動作対象(直接目的語と間接目的語)・共起要素・後接語の様相を考察し、モノスの自動詞用法・他動詞用法の比重と、内実の移り変わりを記述する。また、モノスにおける他動詞としての用法の発展・拡大の過程を明らかにする。

3、分類の基準

モノスの用例を見ると、古代日本語では、自動詞用法は大きく「移動を表わすもの」、「存在を表わすもの」、「その他」(「妊娠する」「生まれる」「なる」など)に分けられ、他動詞用法は目的語によりそれぞれである。しかし近現代以降は「作品をものする」や「小説をものする」のような用例に限られる。モノスはどのように現在の様相に辿り着いたのか、本稿はモノスを以下の基準に基づいてどのような文脈で用いられるかという観点から分類し、それぞれの特性について考察する。

3.1 自動詞の場合

【移動の意を表わすもの】

影山(2001)によれば、移動動詞には主に「有方向移動動詞」と「移動様態動詞」の 2 種類がある。「有方向移動動詞」は、「何らかの方向性を固有に備えている」、また、それ自体で有

[1] 調査対象は本稿末尾の「使用テキスト」「デジタル資料」を参照されたい。

界的な起点または着点を持っているかどうかによって、「有界的な有方向移動動詞」と「非有界的な有方向移動動詞」に分けられると言う(影山(2001)、p.47)。「移動様態動詞」は、「移動に伴う様態(または手段)を固有に表わすと考えられる動詞」であり、「それ自体では非有界的であり、起点・着点を明示しないかぎり、いつまででも継続可能な移動を表わす」(影山(2001)、p.47)。本稿では、移動の意を表わすモノスを「有方向移動動詞」と「移動様態動詞」に分けた上で、移動の目的地に到着したか否かについて考察する。

【存在の意を表わすもの】

金水(2006)によれば、存在表現は、大きく「空間的存在文」と「限量的存在文」に分けられる。「空間的存在文」は、場所と対象を項として取る二項述語である(表層に場所名詞が現れていない場合には、省略されていることになる)。物理的な時間・空間を対象が占有する。「限量的存在文」は、一項述語であり、場所名詞句が不要に見えるもの、あるいは想定しにくいものが多い。

【その他の意を表わすもの】

具体的な文脈で判断する。

3.2　他動詞の場合

中古・中世において「～ヲ＋モノス」のように直接目的語が明示される用例は非常に少なく、格表示と補語だけでは自動詞か他動詞か判断しにくい場合が多い。そこで本稿は使用資料の解釈、注釈等を参照し、意味の観点も考慮してモノスを自動詞か他動詞かに分類する。他動詞的な動き、または他動詞の代用と思われるものについては、直接・間接目的語という観点からモノスがどのように変化していくのかを検討する。

4、調査結果

4.1　中古の様相[2]

4.1.1　自動詞の場合

前節で示した分類基準に基づき、中古の自動詞として使用されるモノスの用例の意味を考察した結果、385 例のうち、移動の意を表わすものが 189 例、存在の意を表わすものが 158 例、次いでその他の意を表わすものの 38 例は「なる」「結婚する」などの意を表わしている。

4.1.1.1　移動を表わすモノス

先に移動の意を表わすモノスの用例分布を表 2 に示す。

表 2．中古期移動の意を表わすモノスの種類及び用例数と割合

種類	有方向移動	移動様態	計
未到達	25(13.2%)	−	25
到達	143(75.7%)	−	143
非到達	21(11.1%)	−	21
計	189	−	189

表 2 に示したように、移動を表わすモノスの用例は、全て何らかの方向を備えており、その方向に向かって移動することを表わす。「移動様態」を表わすモノスの用例は見当たらない。また、「未到達」を表わす用例と「到達」を表わす用例を合わせて、80%以上の用例は「到着」という移動の結果が伴う。

[2] 中古の用例採取は、国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2020.03，中納言バージョン 2.5.2、最終閲覧日 2020 年 08 月 20 日)、Japan Knowledge Lib(「新編日本古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース)を使用し、観察を行った。

①「未到達」類

「未到達」移動を表すモノスは 25 例ある。(4)は、後文脈の「女いにけり」のところから動作主の女が移動の動作を伴っているとわかる。しかし、目的地「世界」に到着したかどうかは文脈に明示されていないため、「未到達」類とする。

(4)　「(略)世界にものしたまふとも、忘れで消息したまへ。おのれもさなむ思ふ」といひけり。(略)さて女いにけり。　(大和物語・295 頁)

②「到達」類

「到達」したことを表わす用例は 143 例ある。(5)は、道綱母の叔母が京より道綱母の家に来た場面である。モノスは助動詞「たり」と共に用いられ、移動動作主の叔母が「移動してきて〈今・ここ〉に存在している」[3]という意を表わす。移動し目的地へ到着した用例である。

(5)　京より、叔母などおぼしき人ものしたり。　(蜻蛉日記/中・233 頁)

③「非到達」類

「非到達」を表す用例は 21 例である。そのうち、11 例は動作主が「行く意志」を持っているが、何らかの原因で移動が適わない用例である。6 例は動作主の「行かない意志」を表している用例である。どちらでもない用例は 4 例ある。(6a)は、兼家が道綱母のところに宵から行きたいと思っていたが、行くことができなかったと言っている場面である。後文脈には「昔なら馬に乗ってでも来た」という反実仮想を表している。(6b)は、兼家が山寺にいる道綱母を迎えに行く場面である。兼家は自分が行ったのではだめだと思うので、行く気はないと述べている。果たして、道綱母は寺から下りなかった。

(6)a　「宵よりまゐり来まほしうてありつるを、をのこども、みなまかり出にければ、えものせで、昔ならましかば、馬にはひ乗りてもものしなまし、なでふ身にかあらむ、(略)」など心ざしありげにありけり。　(蜻蛉日記/下・290 頁)

b　おのがものせむには、と思へば、えものせず。　(蜻蛉日記/中・238 頁)

上に記した移動を表わすモノスの用例を見ると、移動の結果、目的地に到着した用例が多い(189 例中 143 例)ことから、モノスは「達成」という意味的な性質を持つ語と考える。例えば次のような用例も見られる。(7a)は、道綱母が唐崎に行く場面である。唐崎へ行く道は遠いということを繰り返し述べている。また、途中で馬を休めたり、弁当を食べたりしてようやく唐崎に着いたことについて述べている。(7b)は夕霧が祖母大宮が住んでいる所へ移動した場面である。大宮が、「大きな木の枝が折れる音もするし、殿の瓦も残らずに吹き飛んでしまうぐらいの激しい風なのに、よくもここに来た」と感心する場面である。このように、移動を表わすモノスは「達成」の意味合いがあり、また困難を乗り越えて目的地に辿り着く意味的性質を持っている。

(7)a　唐崎へとてものす。(略)行先多かるに、大津のいとものむつかしき屋どもの中に、引き入りにけり。(略)しばし馬ども休めむとて、清水といふところに、かれと見やられたるほどに、(略)「ここにて御破子待ちつけむ。かの崎はまだいと遠かめり」と言ふほどに、(略)さて、車かけて、その崎にさしいたり、　(蜻蛉日記/中・193～195 頁)

b　(大宮)「大きなる木の枝などの折るる音もいとうたてあり、殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、かくてものしたまへること」と　(源氏物語/野分・268 頁)

[3] 小田(2015)、p.139。

4.1.1.2　存在を表わすモノス

本節は存在を表わすモノスについて述べる。まず、その用例数と割合を表 3 に示す。

表 3．中古期存在を表わすモノスの用例数と割合

種類	用例数
空間的存在文	78(49.4%)
限量的存在文	80(50.6%)
計	158

存在を表わすモノスは全 158 例が採取できる。

①「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、62 例は(8a)のような、いずれも場所名詞句が伴う、あるいは場所が想定できる「所在文」（金水（2006）など）である。(8a)は、「こぼれたる家」という場所名詞句が見え、存在の動作主はその家に存在している。残りの 16 例は、(8b)のような、場所名詞句は明示されないが、「この世に」「あの世に」などが想定でき(明示される場合もある)、有生の対象物の生死を表わす「生死文」（金水（2006））である。(8b)は、右近が、「もし夕顔がまだ生きているなら、明石にも負けない寵愛を受けるだろう」と思う場面である。

(8)a　こぼれたる家にて、いといたくもりけり。「雨のいたく降りしかば、えまゐらずなりにき。さるところにいかにものしたまへる」といへりければ、　（大和物語・298 頁）

b　心よくかいひそめたるものに女君も思したれど、心の中には、故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、　（源氏物語/玉鬘・87 頁）

②「限量的存在文」

「限量的存在文」のうち、「部分集合文」（金水（2006）など）に当たる用例は 20 例である。(9a)は、玉鬘に思いを寄せる人々が大勢いることを表わすものである。名詞句「聞こえたまふ人」という部分集合が設定され、モノスはその集合の要素について有無多少を述べている。また、残りの 60 例は、(9b)のような、動作主がある性質やもの・人を所有するという意を表わす「所有文」（金水（2006）など）である。(9b)のモノスは「思うこと」が存在するという意を表わす。

(9)a　聞こえたまふ人、いとあまたものしたまふ。　（源氏物語/胡蝶・174 頁）

b　（致仕の大臣）「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせらるらんものを。（略）」とのたまはせて、　（源氏物語/夕霧・486 頁）

存在を表わすモノスを観察すると、中古の段階では「限量的存在文」と「空間的存在文」はそれほどの差がない。存在の結果が存続し、所有対象(物)となっている限量的存在文に相当する例が空間的存在文と同程度見られるということを確認しておく。

4.1.1.3　その他の意を表わすモノス

自動詞としてのモノスにおいて、移動と存在以外の意を表わす用例は 38 例ある。うち 29 例は「なる」「妊娠する」などの無意志的自動詞に相当し、9 例は「結婚する」「会う」「仕える」などの意志的自動詞に相当する。(10a)のモノスは「なる・就く」の意を表わす。(10b)は北の方が、少将に縁談の辞退を勧める場面である。「なものしたまひそ」は「結婚しなさるな」という禁止の意を表わす。

(10)a　「(略)かく申せば、男君の大臣近くものしたまふを申すとぞ思すらむ。(略)」とぞ言ふ。　（蜻蛉日記/下・278 頁）

b　北の方、「いであなにく。人あまた持たるは、嘆き負ふなり。身も苦しげなり。なものしたまひそ。(略)」とて、　(落窪物語・148 頁)

4.1.1.4　自動詞としてのモノスについての考察

ここまで 4.1.1 節に示したことから、中古の自動詞としてのモノスの様相を考えると、以下の特徴が見える。

①移動を表わすモノスを見ると、有方向的な移動を表わす場合が多く見られ、移動の結果(到着)が含意される例が 80%以上である。また遠い場所へ移動したり困難を乗り越えて移動したりすることから、モノスは「辿り着く」という意味合いが強く、「達成」という性質を持つといえる。

②存在を表わすモノスを見ると、「空間的存在文」と「限量的存在文」に相当する例が同程度に多い。限量的存在文では、存在の結果が存続し、所有対象(物)となっている点が特徴的である。

③移動と存在以外の意を表わすモノス（その他の意）の用例を見ると、中古には、意志的動作より、無意志的動作に相当するものが多い。

4.1.2　他動詞の場合

中古の他動詞としてのモノスは 192 例ある。目的語の種類により用例を分類した結果を、表 4 に示す。

表 4. 中古期他動詞としてのモノスの目的語とそれに対応するモノスの意味と用例数

目的語		モノスの意味と用例数(192 例)
衣食生活関係	こと、もの、車、焼米、御衣、破子など	「する」「食べる」など(68 例)
言語・心理活動関係	消息、「(話)」、「(手紙)」、「(歌)」、返りごと、文など	「言う」「書く」「伝える」「詠む」「作る」など(105 例)
人	皇女、重き病者、使ひなど	「寵愛する」「見舞う」など(15 例)
明示されない		(文脈により)「出産する」など(4 例)

衣食生活関係の目的語を取る用例は 68 例である。目的語により、モノスは様々な意味を表わすことができる。(11a)は、直接目的語「魚など」を取り、モノスは「食べる」という意で使われる。(11b)は、「表紙、紐などいみじうせさせたまふ/草子ども」が直接目的語であるが、モノスはそれに接しておらず、動作の受け手（兵部卿宮、左衛門督など）という間接目的語を取る。この場合のモノスは「頼む」という意を表わす。

(11)a　からく催して、「魚などものせよ」とて、　(蜻蛉日記/中・240 頁)

b　まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。(源氏)「兵部卿宮、左衛門督などにものせん。(略)」と、　(源氏物語/梅枝・417 頁)

言語・心理活動関係の目的語が最も多く、105 例ある。そのうち、61 例は(12a)のような、具体的な手紙・発話・歌・心内文の内容を引用し、モノスは「書く」「言う・話す」「詠む」「思う」などの意を表わす。44 例は(12b)のように格表示がある場合と、格表示がない場合があり、モノスは伝達動詞や思考動詞として用いられている。

(12)a　「ここに住みたまひし人は、いまだおはすや。『山人に物聞こえむと言ふ人あり』と

ものせよ」と言へば、（堤中納言物語・388 頁）

b　宿世やありけむ。いとあはれなるに、「さらば、かしこに、まづ御文をものせさせたまへ」とものすれば、（蜻蛉日記/下・283 頁）

このように、中古におけるモノスの他動詞としての用例を見ると、他動詞と言っても、「言う」「思う」など、伝達動詞・思考動詞という他動性が弱い他動詞に相当する用例が多い。目に見える対象物の状態・位置変化が明確でなく、頭の中での思考内容の生起または言葉・伝達内容が位置変化する（移動し、伝達される）用例である。ヲ格名詞句を伴うモノスの場合、「手紙を書く」「言葉を発する」という意味での用例はあるが、対象ヲ格を持ち、状態・位置変化を表わす典型的な他動詞や、「A を B に V」という直接目的語・間接目的語を備えた他動詞の用法はまだ顕著に現われていない。また、「食べる」の意のモノスも食物に及ぼす変化というよりも、動作主の動作そのものに主眼があると言える。動作対象に何らかの影響や変化を及ぼす用例は認められないと言ってよい。

4.2　中世の様相[4]

4.2.1　自動詞の場合

4.2.1.1　移動を表すモノス

本節では、中世における移動を表わすモノスについて考察する。調査・分類は中古と同じ方法で行う。表 5 は移動を表わすモノスの種類と用例数を示すものである。

表 5．中世期移動を表わすモノスの種類及び用例数と割合

	中世前期　68 例		中世後期　12 例		計
種類	有方向移動	移動様態	有方向移動	移動様態	
未到達	16(23.5%)	−	1(8.3%)	−	17(21.3%)
到達	46(67.6%)	−	11(91.7%)	−	57(71.2%)
非到達	6(8.8%)	−	−	−	6(7.5%)
計	68	−	12	−	80

中世期における移動を表すモノスは 80 例が採取できた。そのうち、中世前期が 68 例、中世後期は 12 例、「移動様態」の用例は中古と同じように見当たらない。また、「未到達」と「到達」の用例を合わせて、90%以上の用例が「到着」という結果を伴っている。「非到達」に関して、用例採取に用いた資料が少ないため、中世後期は「なくなる」とは言えないが、減少しているのは確かである。一方、移動を表わす類そのものの顕著な衰退も、中世期のモノスが示す重要な様相である。

「有方向移動」としてのモノスは中古と同じように、何らかの方向に向いて移動し到着した用例の割合が高い。(13a)は、関白が白河院から後涼殿の尚侍の伝言を聞き、急いで後涼殿へ向かって到着した場面である。(13b)は、姫君の世話役が二月の時大弐の北の方になって、近々筑紫へ行く場面である。文脈には明示されていないが、いずれは目的地に到着する用例である。

(13)a　（白河院）「後涼殿の尚侍の、聞こゆべきことなんあるを、（略）」とばかりありけれ

[4] 中世の用例採取は、国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』（バージョン 2020.03，中納言バージョン 2.5.2、最終閲覧日 2020 年 08 月 20 日）、Japan Knowledge Lib(「新編日本古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース)、『中世王朝物語全集』(笠間書院)を使用し、観察を行った。

ば、いかなることにかと思して、急ぎものし給へるに、かの伏見の人のことをぞ、

（いはでしのぶ/巻二・149 頁）

b　「このあなたにものしたまふ姫君の御後見は、如月の頃ほひより、大弐の北の方になりて、近きほどに筑紫へものせんと出で立ちたまふを、(略)」とて、(八重葎・76 頁)

このように、中世期における移動を表わすモノスは中古と同じように、「達成」という特徴を持っている。注目したいのは、中世後期における移動を表わすモノスの用例である。12 例中 9 例は(14)のようなものである。(14)のモノスは、呉(2019)が述べるところの、複合動詞の後項として働き、「−来」に相当する例である。モノスの目的地は明示されないが、「この世」という目的地が想定できる。その目的地に到達したという点で「達成」という意味合いが読み取れる。また、世継ぎとなったという点で「結果」を伴っていると言える。

(14)　あまた出でものし給ぬる、終のまうけの君にてこそおはしますめれ。　(増鏡・477 頁)

4.2.1.2　存在を表わすモノス

表 6．中世期存在を表わすモノスの用例数と割合

種類	中世前期	中世後期	計
空間的存在文	64	3	67(42.4%)
限量的存在文	86	5	91(57.6%)
計	150	8	158

存在を表わすモノスの用例は 158 例が採取できた。全体的に「限量的存在文」の割合が、「空間的存在文」より多くなっている。

①「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、「所在文」は 64 例あり、「生死文」は 3 例ある。いずれも場所名詞句が伴う、あるいは場所が想定できる。(15a)は、「伊勢」という場所名詞が見え、存在の動作主は長年伊勢に存在しているという「所在文」である。(15b)は、右大将が、母故前斎院のお墓に参り、「もし母君がこの世に生きているであれば」などと思う場面である。このような、場所名詞句は「この世に」と明示され、有生の対象物の生死を表わす「生死文」である。

(15)a　伊勢にも年ごろものし給ひしは、院のまことの御子にこそおはしけむに、

（我が身にたどる姫君/下・96 頁）

b　まいて、かの母院の御山をさして参り給ひつつ、(略)「さすが、この世にものし給はんを見捨てては、憂しとても、ひたすらそむきやらざらまし」と思ふは、

（いはでしのぶ・342 頁）

②「限量的存在文」

(16a)は、中将が「今までそのようなことを知っているはずの人がない」と思う場面である。名詞句「今までさること知るべき人」という部分集合が設定され、モノスはその集合の要素について有無多少を述べている。このような「部分集合文」に当たる用例は 16 例ある。(16b)は、承香殿という人が、故式部卿宮の娘の女御であり、寵愛も重々しく深く、女宮二人を持っていることを表わす。モノスは「女宮二所」が存在するという意を表わす。このような「所有文」に相当する用例は 75 例ある。「限量的存在文」に相当する例の多さは、中古以上に顕著となっている。「結果(物)を伴う」というモノスの性質の表れとみておきたい。

(16)a　(中将)「北の方の聞き思さんこともいかが。つつましう。今までさること知るべき人もものせられぬを」と思す。　（しら露/下・233 頁）

b　またそのころ、承香殿と聞こゆるは、故式部卿宮の女御ぞかし。御おぼえも重き方浅

からぬが、女宮二所ものし給ふ。　（風に紅葉/上・25 頁）

4.2.1.3　その他の意を表わすモノス

その他の意を表わす 34 例のうち、「なる」「妊娠する」などの無意志的自動詞に相当する用例が 25 例、「就く」「結婚する」などの意志的自動詞に相当する用例が 9 例見られる。中古と同じように無意志的自動詞に相当する例が多いが、注目すべき点は、「妊娠する」「結婚する」という「結果(物)」が伴う用例が 18 例に上る点である。特に「妊娠する」の意を表わす用例は 8 例見られる。(17)は、世継がいないため、諸山諸寺で祈祷をしていた折に内侍の督の君が懐妊したという場面である。モノスは「妊娠する」意として用いられる。

(17)　儲けの君おはしまさぬころにて、山々寺々御祈りあるころ、かくものし給へば、限りなくおぼし喜びたり。殿も、大将殿も、男宮にておはしまさんを、今より面ただしくおぼすべし。　（とりかへばや・282 頁）

4.2.2　他動詞の場合

中世期他動詞としてのモノスは 45 例見出された。具体的な目的語を表 7 に示す。

表 7. 中世期他動詞としてのモノスの目的語

目的語		モノスの意味と用例数(45 例)
衣食生活関係	事、御料、鯉、御葬送、車、装束、法服など	「用意する」「食べる」など　16 例
言語・心理活動関係	御消息、もの、ことなど	「考える」「言う」など　9 例
人	中納言、子供、姫君など	「出産」「誘う」　7 例
明示されない		(文脈により)「する」など 13 例

(18)はヲ格を取る用例であり、目的語「御消息」が明示され、モノスは「書く」「差し上げる」の意として使われる。このような他動性の高い動作を表す用例はわずかである。(19)は再び懐妊した女君が無事に出産できるように、殿が祈祷を始めた場面である。目的語が明示されていないが、文脈により「出産する」の意と判断できる。

(18)　御消息をもものし聞こえまほしう思しわたりつつ、　（しら露/下・254 頁）

(19)　いみじかりしことに懲りて、かねてより御心を尽くし、御祈りなどはじめ給ふ。思ふさまにたひらかにものし給はば、　（夜寝覚物語/巻五・371 頁）

このように、中世も中古と同じく、他動性が弱い他動詞がほとんどである。ヲ格名詞句を伴うモノスの場合は、「消息を差し上げる」「ことをなす」という意味であり、状態変化や位置変化は表されていない。「出産する」という状態変化がある用例が見られるが、4 例であり、動作対象も明示されず、解釈は文脈に依存する。主眼は動作主の動作にある。しかし「結果物」が伴うという特徴は共通して見られる。

4.3　近世の様相[5]

[5] 近世の用例採取は、国立国語研究所(村山実和子ほか)編(2020)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』(バージョン 2020.03、中納言バージョン 2.5.2、最終閲覧日 2020 年 08 月 23 日)、Japan Knowledge Lib(「新編日本古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベー

4.3.1　自動詞の場合

自動詞としてのモノスの用例は 25 例見られた。うち移動を表わす用例は 16 例あり、いずれも目的地に到着する予定/到着した用例である。存在を表わすモノスは 2 例であり、それ以外の用例は 7 例で、「なる」などの変化の意であった。表 8 に示す。

表 8　近世における自動詞としてのモノスの様相

移動を表わすモノス			存在を表わすモノス		その他	計
	有方向移動	移動様態	空間的存在文	限量的存在文		
未到達	2	−	所在文 2	−	7	
到達	14	−				
非到達	−	−				
計	16	−	2	−	7	25

(20)は動作主が目的地の「江戸」に行って帰ったのであり移動の動作は完了している。(21)は、「空間的存在文」に相当する用例であるが、複合動詞の後項として「ゐる」の代用をしている。「立つ」は「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞であり、(21)のモノスが「来」「行く」の意を表わす可能性もある。しかし、動作主は弁天さまの前に立っており、動きがなく、じっとして願っているため、モノスは「ゐる」の意を表わすと考えられる。

(20)　おのれ、江戸にものしけるとき、狂蝶子文麻呂がり、　（白癡物語・237 頁）

(21)　私はいゝなづけのお方の為に、神さんへ願をかけ、弁天さまへ立ものして、男の手にもさはるまひ、三年の内は恋しひ人に、めぐり逢ても一所へは寄ますまいからどふぞして、尋ねあはしてくださいましと、誓ひをたてゝ深いねがひ。

（人情本/春色梅兒譽美・70 頁）

4.3.2　他動詞の場合

他動詞としてのモノスは 120 例が採取された。そのうち、動作が動作対象に及び、それに状態・位置変化が起こったものは 37 例あり、全用例の 30.8%を占める。また、(22)のように、「A を B に V」という形の他動詞としての用法の確例が、近世以降現れることが確認できる。(22)は、「埋れ木」を掘り出し、「硯の箱」に作りかえるという目に見える状態・位置変化が起こる用例である。(23)は、動作対象の「少女の親」はモノスという動作の影響を被り、目に見える状態変化が起こるものである。いずれも他動性が非常に強い用例である。

(22)　多くの人夫して、名取河の水底を浚せ、とかくして埋れ木を掘りもとめて料紙、硯の箱にものし、　（近世俳文集・530 頁）

(23)　「然ればこそあれ少女の親は、両眼片脚を傷られて、廃人になりしのみならず、田文の洞に露宿して、袖乞難て饑に迫るを、(略)」と詰るを成勝推禁めて、「(略)然までしうねくものせられしは、疑ふべく従ふべからず。(略)」と左右斉一諌れば、

（近世説美少年録(3)・347 頁）

ス、噺本大系本文データベース)を使用し、底本の『新編古典文学全集』(小学館)、旧版『日本古典文学大系』(岩波書店)、『噺本大系』(東京堂出版)を対照しながら観察を行った。

また、(24)(25)のような、「金銀」や「款冬花（＝小判または大判）」などが直接目的語となって、モノスが「盗む」や「手に入れる」の意として用いられる用例が 15 例見られる。しかも「盗む」「手に入れる」動作の結果として、実際に手に入った用例である。これらも他動性が強いといえる。

(24)　「（略）今宵家内に潜入りて、咱はある涯りの金銀をものせん。（略）」（略）俱に納戸に潜入りて、朱之介は那這と、撈りて財嚢を引出し、

（近世説美少年録(3)・102 頁）

(25)　「（略）我は背門より潜入りて、阿爺が納戸に秘措ぬる、款冬花をものしてん。（略）」（略）亓が間に朱之介は、戸架の内なる小箪笥を、撈りて奪ふ財嚢には、金二裹の重みあり。　（近世説美少年録(3)・88～91 頁）

さらに、作品の序文あるいは跋文で、「本を作る」「作品を版木に刻む」などという意で使用される用法も 10 例見られる。(26)は作品を抜粋し、「桜木に物して、世に広ふ」という目的を伴った用例である。「意志性」[6]の高さは他動性の強さも表しているといえる。

(26)　その中にさる事也とおもふを撰み、山王の桜木に物して、世に広ふせんとや。

（会席噺袋/序・320 頁）

以上の近世の様相をまとめる。近世の自動詞としてのモノスの用例を見ると、中古から見られる移動を表わすモノスが割合は減らしながらも継続して見られる。その一方で、存在を表わすモノスは 1 例しか見られない。その原因は現段階では明らかでないが、今後検討したい。モノスの表す動作には中古以来、自動詞であれ、他動詞であれ、「結果(物)」を伴う用例が多い。本稿では、モノスが持つ、この特性に着目している。「結果物」は、「意志性」や「他動性」を伴う動作によって生み出されやすい。中世後期から近世にかけて「他動性」と「意志性」が強くなっていることは、「結果物」を伴うという性質の強化と考えられる。「存在」を表すモノスが見られなくなることについても、この性質との関わりで考察していく余地がある。もちろん、モノス自体の変化だけでなく、他の要因についても考え合わせていく必要がある。

近世の他動詞としてのモノスを見ると、中古・中世との大きな違いとして、他動性が強い用例が増えた点が挙げられる。また、中古・中世で多く見られる「言う」「書く」「思う」などの言語活動を表わす用例より、「盗む」「手に入れる」「作る」など、意図性が強く、結果物を生じる動作であって、動作対象に何らかの変化や影響を与える用例が数多く見える。

4.4　近現代の様相[7]

4.4.1　自動詞の場合

近現代の自動詞としてのモノスは 5 例見られ、いずれも擬古文で用いられている用例である。(27)は場所名詞「佐倉」が提示され、「有方向移動」である。モノスは「行く」「通う」と理解できる。

(27)　風まじり雨はふれどもちらぬかな紅葉はいまそ盛なるらん　佐倉に物する道にて

（藤島正健　太陽 1895 - 11）

---

[6] 「意志性」は、「自分の意志で、その動作を行う」（角田(2009)、p.86)性質のことである。

[7] 近現代の用例は、国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』（バージョン 2020.03，中納言バージョン 2.5.2、最終閲覧日 2020 年 08 月 23 日）、見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ、日本語用例検索・青空文庫所収文学作品を用いて採取した。

4.4.2　他動詞の場合

他動詞としてのモノスは、112 例が採取できた。全用例の 95.7%を占める。そのうち、87 例は動作が動作対象に及び、その動作対象に何らかの状態・位置変化が起こったものである。

近世から現れる作品の序文・跋文などでの用法は、(28)のように、作品の補記・備考にも用いられ、9 例見られる。(29)は、「和歌」という直接目的語を取り、モノスは「作る・書く」の意で用いられ、「短歌雑誌に投稿している」という結果を伴う。

(28)　編者「題言」によると、フランス訳司「ユウシンメルメットデカシュン」に邦語を教え、問答形式の本書をものす。」　(匏庵十種　鉛筆紀聞(一)・補記　明治二年出版)

(29)　お梶さまは和歌など物して短歌雑誌に投稿している人だから、オットリ奥さま然としているけれども、(略)。　(坂口安吾・『不連続殺人事件』)

近現代以降の他動詞としてのモノスは、90%以上の用例に直接目的語が示されており、他動性が強い用例がほとんどである。また、(28)(29)のように、目的語が「書」「和歌」(その他には「小説」「詩」「芸術」「作品」なども見られる)のような、文芸作品に関するものであることが多く、モノスは「書く」「作る」「作成する」などの意を表わす。「書く」という意味で用いられるモノスは中古・中世にも見られるが、近現代期に特徴的な点は、動作が動作対象に及んでいることと、具体的な結果物があることである。

5、まとめ

モノスの自動詞の使用傾向については、以下のようにまとめられる。

① 移動を表わす場合は、移動して目的地に到着する予定がある、または到着した用例が多い。また、遠い所へ移動する・困難を乗り越えて移動する・移動ができなくても移動の意志を持っている場合に用いられている。以上の点から、移動を表わすモノスは「達成性」「意志性」という性質を持っているといえる。中古～中世前期に高い割合を示し、近現代では擬古文を中心に存続する。

② 存在を表わす場合は、特定の場所に人(物)が存在している意を表わすより、対象(物)の存在を所有として表わす傾向が見られる。中世後期以降、用例の減少が顕著である。

③「妊娠する」「生まれる」「出産する」などの意としてのモノスは、中古中世において一定数の用例がある。「結果物がある」という特性において、他動詞用法と共通点を持つ。

また、モノスの他動詞用法の拡大については、以下のようにまとめられる。

① 中古のモノスには言いたいこと・話したいこと・思うことや手紙などを目的語として取り、「言う」「思う」「手紙を書く」などの意を表わす。言葉や内容が移動していると捉えられるが、目に見える具体的なものの移動や状態変化は認められない。ヲ格を取る用例もあるが、他動詞的な対象物への作用が明確でなく、「A を B に V」という他動詞的な格表示が明確な用法はまだ現われない。このような他動詞は他動性が弱いが、自動詞用法とも異なる。

② 中世も中古と同じように、他動性が弱い他動詞がほとんどである。ヲ格を伴うモノスの場合は、「消息を差し上げる」「何らかの事柄を行う」という意味であり、状態変化や位置変化が顕著に表されていない。「出産する」という状態変化がある用例が見られるが、動作対象が明示されていない点で、主眼は動作主の動作にあるといえる。

③ 近世に入ると、「A を B に V」という他動詞の構造を備えた用例が現われ、「盗む」「手

に入れる」「作る」のような、動作が動作対象に及んでおり、動作対象の状態・位置変化が見られる用例が増える。また「世に広ふ」などの意図を伴い、作品とする・版木に刻むなど、他動性が強い用例が増えている。

④ 近現代になると、ほとんどの用例は「A を B に V」という直接目的語・間接目的語を備えた他動詞用法で使用されている。

まとめとして、モノスの自動詞と他動詞及びその用法ごとの各時代に占める割合を表 9 に示す。

表 9　モノスの自動詞と他動詞及びその用法ごとの用例数と各時代に占める割合

種類／時代	自動詞　687 例			他動詞　469 例		計
	移動	存在	その他	言語・心理活動	その他	
中古	189(32.8%)	158(27.4%)	38(6.6%)	105(18.2%)	87(15.1%)	577
中世前期	68(23.4%)	150(51.5%)	30(10.3%)	9(3.1%)	34(11.7%)	291
中世後期	12(46.2%)	8(30.8%)	4(15.4%)	0	2(7.7%)	26
近世	16(11.0%)	2(1.4%)	7(4.8%)	9(6.2%)	111(76.6%)	145
近現代	5(4.3%)	0	0	5(4.3%)	107(91.5%)	117
計	290	318	79	128	341	1156

モノスは古くから自動詞用法も他動詞用法も見られるが、自動詞用法が次第に減少し、他動詞用法が増加するという変化が見える。また、他動詞としてのモノスは当初、意志性を持ちながらも、具体的な動きを伴わないという点で自動詞に近く、直接・間接目的語を取っても他動性が弱い言語・心理活動を表わすものが主であった。一方、時代が下ると、具体的な A,B を直接・間接目的語として持つ「A を B に V」という他動詞用法の比重を高めていくという変化が見える。しかし、自動詞にせよ他動詞にせよ、モノスの動作は「達成する」「結果物がある」という特性が伴うことは中古から近現代まで一貫している。中古・中世において、移動を表わすモノスは、目的を持って移動し、辿り着くという結果が伴う用例が多く見られる。中古・中世期において他動詞として用いられるモノスは「言う」「書く」などの他動性が弱い用例がほとんどだが、「言う」動作は「発話」という結果物を伴い、「書く」動作は「手紙」や「詩」などの結果物を伴っている。近世以降は他動性が強い他動詞の用例が増え、動作が完遂した結果、目に見える/手が触れる結果物を伴っている。このような、モノスの「達成する」「結果物がある」という特性には一貫性が見え、むしろ近世以降はさらに明確化・具体化すると言える。

今後は、自動詞として、「存在」を表わすモノスがなくなった理由、モノスの他動詞用法の拡大した原因も探りたい。この点について考察するために、また、モノスの特徴についてより説得的に述べるためには、例えば「移動」「存在」用法において、それぞれ「行く」などの移動動詞、「あり・をり」などの存在動詞が使われる場合と、代動詞としてのモノスが使われる場合との、文脈条件の違いも精査する必要がある。

なお、用例を観察した時、作品や文体によっても、モノスの使用の偏りが見られる。例えば、和歌での使用が見られず、中古には物語類と日記類で多用されていることが、先行研究(近藤

(1995)、中村(1995))でも指摘されている。また、筆者の調査では、中世にはほとんどの用例が王朝物語に現れ、擬古文や説話集などでの使用例も少数見られるが、軍記物語での使用が全くないことなども確認している。文体史という観点からモノスの歴史的変化を見る必要もあると考える。

使用テキスト

【中古】『新編日本古典文学全集』(小学館)：竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館)：宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄／『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)古今著聞集、増鏡／『中世王朝物語全集』（笠間書院）：あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)、我が身にたどる姫君(下)【近世】『洒落本大成』（中央公論社）／『新編日本古典文学全集』(小学館)：好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語『日本古典文学大系』(旧版)(岩波書店)：芭蕉文集、歌舞伎脚本集、風来山人集、近世文学論集、川柳狂歌集、近世和歌集、浮世草子集、春色梅兒譽美、折たく柴の記、近世思想家文集、歌舞伎十八番集／『噺本大系』(東京堂出版)：昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春噺大集、戯言養気集、軽口筆彦噺、会席噺袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落噺顋懸鎖、杉楊子、初音草噺大鑑、臍が茶、新撰勧進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落噺常々草

参考文献およびデジタル資料

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
角田太作(2009)『世界の言語と日本語　言語類型論から見た日本語　改訂版』くろしお出版
影山太郎(2001)『日英対照　動詞の意味と構文』大修館書店
金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
近藤明日子(1995)「「ものす」攷」『学習院大学国語国文学会誌』(38), pp.12-29
呉寧真(2019)「動詞連用形に後接する「ものす」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』(50), pp.19−33
中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院, pp.37-49
東辻保和(1960)「「ものす」考」『論究日本文学』(12) , pp.28-35
松延国子(1957)「「ものす」について：平仲物語前後」『香椎潟』(2), pp.18-25
JapanKnowledge Lib（http://japanknowledge.com/library/）
国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』（バージョン 2020.03，中納言バージョン 2.5.2）
全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品（http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/）
日本古典文学大系本文データベース　（http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/）
噺本大系本文データベース　（http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon）
見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ（http://nlb.ninjal.ac.jp/search）
＊本稿は中国国家留学基金(201908050116)の助成を受けたものである。